

第464回

広島大学医学集談会

(平成14年7月4日)

—学位論文抄録—

1. Changes in isokinetic muscle strength of the lower extremity among recreational athletes with anterior cruciate ligament reconstruction
(スポーツ愛好者における膝前十字靭帯再建術後の下肢等速性筋力の推移)

浦 辺 幸 夫

(保健学科 運動・代謝障害理学療法学)

本研究は、膝前十字靭帯 (ACL) 再建術後に膝関節筋力のみならず、股関節と足関節を含めた下肢全体に筋力の低下が認められるか否かを明らかにするために行った。44名に対して同じ方法で再建術と、リハビリテーションプログラムが施行された。60 d/s と 180 d/s の等速性筋力が、股関節伸展と屈曲、股関節外転と内転、膝関節伸展と屈曲、足関節底屈と背屈について、再建術前、再建術後3か月、6か月、9か月、12か月の計5回測定された。12か月後まで再建側で有意に筋力が低下したのは膝関節伸展、屈曲と股関節内転だった。膝関節伸展筋力および屈曲筋力と股関節内転筋力の再建側/非再建側比で $r=0.403\sim 0.433$ と有意な相関が認められ、股関節内転筋力の筋力低下は膝関節筋力の筋力低下と密接な関係を有することが示唆された。これらの結果は、リハビリテーションで膝関節のみならず下肢全体のエクササイズの必要性を支持する根拠となると考えられた。

2. Characteristics of family functioning in patients with endogenous monopolar depression

(内因性単極型うつ病患者における家族機能の特徴)

佐 伯 俊 成

(創生医科学専攻・先進医療開発科学講座・精神神経医科学)

内因性単極型うつ病相期の患者20例と同居家族45名の計65名(うつ家族)、および精神科治療のない一般大学生27名と同居家族77名の計104名(対照家族)を対象として、その家族機能を Family Assessment Device (FAD) 日本語版によって評価し、両群

間で比較検討を行った。その結果、うつ家族においては、対照家族に比べて家族機能が広い範囲にわたって低下しており、なかでも「問題解決」「意思疎通」「全般的機能」の3領域の家族機能が特徴的に低下していることが初めて明らかになった。内因性単極型うつ病相期の患者と家族に対しては、家族の問題解決能力をより強化し、家族内の意思疎通をより促進することに特に焦点を当てることによって、家族全体の機能を改善させるような適切な家族介入が重要であることが強く示唆された。この知見は、今後のうつ病臨床における治療的家族介入に重要な指針を提供するものである。

3. Clinical significance of human erythrocyte glucose transporter 1 and vascular endothelial growth factor C expression at the deepest invasive site in advanced colorectal carcinoma.

(進行大腸癌浸潤先進部における Glut 1 および VEGF-C の発現に関する臨床病理学的・免疫組織学的解析)

古土井 明

(創生医科学専攻・先進医療開発科学講座・分子病態制御内科学)

【対象と方法】外科的切除された進行大腸癌152例を用い、Glut 1 および VEGF-C の発現を免疫組織学的に検索し臨床病理学的事項との関連を検討した。

【結果】癌浸潤先進部での Glut 1 および VEGF-C の発現は共に脈管侵襲、移転および予後と有意に関連していた。また VEGF-C 発現例は mRNA レベルでの発現も認められた。一方、癌表層部、中央部では Glut 1 および VEGF-C の発現と臨床病理学的所見に有意な関連は認めなかった。

【結論】大腸癌浸潤先進部での Glut 1 および VEGF-C の発現は、従来の病理組織学的因子とは独立した予後推定因子であり、これらをうまく組み合わせることにより、術後の補助科学療法適応例や厳格な経過観察を要する症例の拾い上げに有用であると思われる。